世界対がんデー

独立行政法人国立病院機構
四国がんセンター

四国がんセンター
病院長　山下　素弘

2月4日の世界対がんデー(World cancer day)は、がんに関心を持ち何かの行動を起すことを目的に2000年から始まり、昨年からは「がん医療のギャップを埋めよう」をテーマに、世界中でがんの知識や治療の格差をなくする努力が進められています。4日夜はは世界の各地でライトアップイベントも計画され、がんに立ち向かう人々に想いを寄せていただたでしょうか?。今回は、わが国でも社会で活躍する女性の患者が増している乳がんにスポットを当て、解説してもらいます。

乳がん治療の最新動向

四国がんセンター
乳腺外科
医長　高畠　大典

乳がんの罹患率は年々上昇している

日本人女性における乳がん罹患率は年々上昇しており、最新統計では女性の9人に1人が乳がんになるといわれています。乳がんは決して他人事ではなく、いつ自分がかかってもおかしくないと認識することが重要です。肺がん、大腸がんなどは高齢になるにつれて罹患率が上昇していきますが乳がんは40代後半から50代にかけて発症年齢のピークがあります。ただし乳がんは他のがんと比べて早期発見しやすく、薬物療法の効果も良好で、実際、ステージ1の乳がんでは90%以上の方が治療後、10年経過しても再発なく元気に過ごされています。このように現在では多くの方が乳がんを克服可能な時代となってきました。

乳がん克服の要は薬物療法

乳がん治療は通常、がんの進行度、乳がんのタイプにあわせて、手術、放射線療法、化学療法(抗がん剤)、ホルモン療法、分子標的薬を組み合わせた集学的治療が行われます。このうち後者3つが薬物療法に分類され、近年の乳がん治療成績向上はこれら薬物療法の進歩の恩恵と言えます。具体的には新規薬剤の導入と個別化治療です。新規薬剤の開発は着々と進んでおり、最近の大きな話題は乳がん術後治療として分子標的薬であるアベマシクリブやオラパリブの承認です。これらの薬剤の導入により、従来再発リスクが高いと考えられた患者さんの治療成績向上が期待されています。ただし薬物療法は必ず副作用を伴うため個々の患者さんの病状を見極めた上で、過不足なく行う必要があります。つまりやり過ぎてもいけないし足りなくてもいけないということです。こうした個別化治療に関連して、近年では乳がん細胞の遺伝子解析で薬剤の治療効果がある程度予測可能になってきました。従来より一層個々の患者さんにフィットした治療法が選択できるようになり、副作用を最小に抑えつつ、最大の治療効果を目指せる時代になってきました。

乳がん治療もゲノム医療の時代へ

同じ薬物療法を行っても乳がん患者さんによって治療効果や経過は様々です。これは同じ乳がんでも異なった性質をもったがん細胞が混在していることが原因です。近年ではゲノム解析により個々のがん細胞の性質を遺伝子レベルで評価することが可能となり、それに合わせた薬物療法を行うようになりつつあります。また患者さん自身の遺伝子解析によって副作用の出方を予想したりすることも徐々に可能になっています。さらには乳がん発症リスクもゲノム解析である程度評価することができるようになり、がん検診の個別化なども模索されています。乳がんに限らず今後のがん診療はこうしたゲノム医療を中心に進歩を続けていくと予想されます。

信頼できる専門医との出会いが重要

このように日進月歩の医療を適切に患者さんの治療に還元することががん専門医の使命であり、我々医療者も常に研鑽を続ける必要があります。信頼できる専門医との出会いが乳がん克服のためには重要と言えます。

【解説】
四国がんセンター病院長：山下泰弘
四国がんセンター乳腺外科医長：高畠大典

広告 有限会社第一広報/089-961-4343